

月刊 やちまなこ

2015.2.15 発行

No. 207

2 月号

釧路湿原国立公園 塘路湖エコミュージアムセンター（あるこっと）だより



湿原散歩

雪煙が舞い、空は吠えながら丘陵の林を揺さぶっている。週末を中心に大荒れの天気は、まるで3月の彼岸荒れのような。近年、春と秋が短くなり、猛暑や厳冬が目立つようで、徐々に四季のバランスが崩れ始めてきたのだろうか？雪の止んだ湖上を風に戯れるようにワタリガラスが飛んでいた。



コッタロ川と湿原のほとりから

176 2月のコッタロ湿原便り

コッタロ在住. 中本 アキ子(文) 中本 民三(写真)

“地吹雪の怒濤地球の喚哉” たて続けに発達しては停滞を繰り返していた低気圧をやり過し、逞しく生きているのは人間ばかりではございません。鹿、狐、狸、貂、及び丹頂を筆頭に野鳥の皆々もじっと耐え忍んだからこそ迎えられた立春を境に、モノトーンのすき間から現れた風の結晶が創り出すユニークな大自然のアートに目を奪われてしまう昨今です。例えばサファイアブルーの空に描かれた雲の面白い形状にしても、水と雪に反射する色とりどりの光のプリズムと丹頂等が織り成すえも云われぬ不思議な景色の数々にしても、それは最早神々からの賜り物としか云いようがありませんね。

寒中とは云うものの、異常気象がもたらす暖冬真っ只中の我家では、諸々の珍現象の発生に大わらわ。中でも2月9日を子別れ完了日としてきた丹頂等に全くその兆しが見られないまま本日(10日)に至っております。又近年増加の一途をたどっていた鹿の個体数が今季は一頭しか目撃されず、しかもそれは事故死の骸となったもので、トビやカラスが群がっていて、それと気付かされたものでした。知り合いのハンター等も異口同音に“鹿がない鹿がない”と嘆いているあり様。そんなある日、大荒れ後の屋敷林の見廻りで林道を入れて行くと“樫(カンジキ)の導く所狸宿”に出合し、びっくり狸と目と目がガッチャンコ。20年間通いなれたはずの山でも、生きた2頭が身を寄せ合って大木の根方の洞に居たのを目撃したのは初めてで、そそくさと引き返してから「証拠の写真」を撮りそこねたことに“後悔先に立たず”を実感! ひるがえって庭の草地へ出ると、雪原すれすれに滑空してくる巨大な影にはたかれそうになって度肝を抜かれていると、あちらさんもギョッとしたりしく、急上昇して去り行く姿を見れば、なんと大ワシの中でも丹頂程もある巨体で、小柄な老婆をまさか、エサと間違えたのではあるまいか? “日脚伸ぶ大ワシの影長々と”の一件でした。

樹木に目を転ずれば“春はもうすぐそこまで来てますよ”と庭のオニグルミの冬芽が羊顔して笑っているではありませんか。



黄色に黒色のメリハリのある印象的な配色のキアゲハは、蛹で越冬し、春と夏の年2回出現する蝶です。アゲハチョウ科の仲間には、ぱっと見がよく似たアゲハ（ナミアゲハ）もいますが、写真のキアゲハは、幼虫の頃にセリ科の草の葉を食べ、アゲハはキハダなどミカン科の木の葉を食べて成長します。種が違くと食べものも見られる所も違います。アイヌ語では区別なく、ギョウジャニンニクの採れる頃に見られる春型は、プクサマレウレウ[ギョウジャニンニク・チョウ]と呼ばれます。



塘路湖畔で雪上散策を楽しみました！（2/14）

前日からの降雪でスノーシュー日和!?!となり、踏み跡のない湖畔歩道・フィトンチッドの森・塘路湖上を散策しました。この日元気に活動していたのは野鳥たちで、オジロワシとアカゲラ、ハシブトガラなどを観察しました。オニグルミの冬芽やエゾヤチネズミの足跡を観察してから湖上へ出て、ペカンペの紙芝居を見ながら茹でたヒシの実を試食して、塘路の自然と雪上散策を楽しみました。



尾村VRを先頭にスノーシューウォーキング。



感激の声があがったアオサギ営巣地。

ネムネムのとうろうろう日記 Vol.53「トンボ（用）のメガネは・・・」

何年か前、釧路の方から「昔、息子が使っていた標本箱をあげるよ。」といわれ、昆虫の標本箱をたくさん頂きました。中には40年ほど前のトンボの標本がずらり。町の天然記念物（ゴトウ）アカメイトトンボだけでも16体も入っています。「中身捨てちゃっていいから。」といわれましたが、とんでもない！郷土館の資料として登録です。現在は特別保護地区に指定されている赤沼で採取した標本が何体も出てきて、国立公園になる前ののかな時代を感じさせます。

採集した日を見ると、息子さんは毎週トンボを採りに行き、夏休みは毎日採りに行き、毎年ほぼ同じ日付で同じ場所に採りにいき・・・「どんだけトンボ好きやねん！」と突っ込みたくなるような熱心さです。また箱に隙間なく少しずつ重ねて標本を入れているものだから、ちょっと触ると隣の標本を引っ掛けて壊しそう。「この細かさはA型？」大雑把なO型には不向きな作業です。

登録作業では標本のお腹やしっぽの先の形を見て、雌雄や種類を判別していくのですが、これがとても小さな部分なので目が疲れます。イトトンボなんて、標本をとめている虫ピンと同じ太さです。標本を手にとって目に近づけても、ピン트가合わない・・・これってまさか老眼!?

辻 ねむ（標茶町郷土館学芸員）



